

地域に入り込み、学ぶ実践プログラム 事例 1

東京農業大学 食料環境経済学科

山村再生プロジェクト 地域再生・活性化の担い手育成教育

**提案する力が地域の魅力を引き出す
 山村実習プロジェクト**

「実学主義」を理念に掲げる東京農業大学。

食料環境経済学科では近年の農村における高齢・過疎化、食料自給率の低下等の問題に鑑み、長野県小県郡長和町での実習を通じて、地域活性化の担い手育成に取り組んでいます。

必要とされる地域を活性化する力

長野県の中東部に位置する人口約7000人の長和町では近年、高齢・



夏の定番作業、草刈り。天井くらいまである草を、草刈り機でどんどん刈っていきます

過疎化が急激に進んでいます。一方で立岩和紙などの伝統工芸や田中山道の宿場町を擁することでも知られ、豊かな自然に恵まれた地域でもあります。このプロジェクトではこうした長和町独自の資源を活かした地域活性化を目指します。学生は毎月1度、2〜3泊の日程で現地の方の指導を受けながら農業や植林、そばづくりに紙漉きなどに取り組みます。担当の立岩寿一教授は、プロジェクトの目的を次のように話します。



立岩寿一教授

「現在、高齢・過疎化は農村だけの問題ではありませんし、企業にも社会的責任という観点から地域貢献が求められます。こうした現況を考慮

した上で、山村で学んだ知識や経験を社会でも応用できる人材を育てるのがねらいです」。

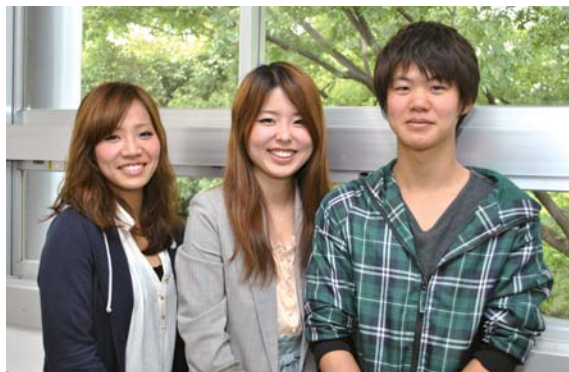
特に立岩教授が重視するのが学生の「提案力」の向上です。実習では学生一人一人にノートが手渡され、左ページにその日の活動内容を、右側に実習を通じて思ったことや地域活性化のためにできることなどの提案を次々書きこんでいきます。そして毎日作業後に設けられる約2時間半のワークショップで、これらの提案



イラスト入りで細かく記入された実習ノート

をグループごとに話し合い、より良い提案にまとめていきます。立岩教授は、このような作業後の徹底したフィードバックが個々の能力を高めていると強調します。

地域への思いが学ぶ力を高める



左から北谷さん、太田さん、櫻井さん

今回お話を伺った櫻井哲さん（4年）、太田早紀さん（3年）、北谷友紀さん（3年）の3人はこれまでに10回以上の参加経験があり、現在は学生委員として、プロジェクトの向上に積極的に取り組んでいます。これまでの体験か

ら、3人はプレゼンテーション能力が向上したと口を揃えます。「ワークショップで毎回20〜30人の前で発表するので、人前で話す力も身についたと思います。最初は緊張しましたが、次第に慣れてスムーズに意見を伝えられるようになってきました」と北谷さん。



大山獅子例大祭の写真。毎年、学生の参加は大歓迎されています

学内での成果報告会での発表や、ラジオ出演を経験した太田さんは「ワークショップを通じて考える力や発信力を養えたと思えます。相手がいかに知らないことを伝える難しさや大切さを知りました」と言います。

オープンキャンパスなどでプロジェクトの説明を担当した櫻井さんは「次第に説明が楽しくなってきた」と言います。「ワークショップや説明会で他者の視点に触れる経験を通じて、複数の意見から、より良い提案が生まれる可能性について考えるようになりました。だからこそ、自分たちでどんどん意見を出していけるように成長したのだと思います」。

「短期間の滞在で学生にできることは限られています。しかし、現地の方の元気で積極的な働きかけがあったからこそ、学生は「何か力になりたい」、「学びたい」との意欲が高まったと思います。学生の活動に触発されて、荒地を花の公園に再生する『芹沢花さかGGの会』を立ち上げた例もあり、ともに良い刺激を与え合っているようです」。

今後の活動継続のために今できること

「就職活動に限界を感じたら、長和町に移り住んで友達と農業をやろうかという話をしています（笑）」（櫻井さん）。

中には長和町へお嫁に行きたいという学生もいるほど。活動を通じて芽生えた長和町に対する愛着は今後プロジェクトを引き継ぐ後輩たちへの思いへとつながります。現在、学生委員会では新メンバーのフォローを始めとして、さらなるプロジェクトの発展に向け試行錯誤を重ねています。

「ワークショップで出た提案の中には、お金や深い知識が必要なものもたくさんあるので、大学に戻ってから学生委員会を中心に勉強会をひらいています」（北谷さん）。

立岩教授はプロジェクトを通じて「自己実現を楽しもう」と言います。「自分で目標を作り、それを解決するために試行錯誤して次のステップへとつなげていく。その楽しさは、社会に出た時、仕事の中に喜びを見いだせる力へとつながっていくのではないのでしょうか」。

「今年自分たちがほとんど動いて、ベストな形を目指したい」と自主的かつ楽しそうに取り組む学生たち。後輩たちへのメッセージとして、長和町へ「行ってほしい」ではなく「来てほしい」という言葉に、受け入れる意識の強さを感じました。

「座って授業を受けるだけではない。座って授業を受けるだけではない。地域の人や環境、色々なことに接することのできる貴重な機会です。だから、沢山の人が来て吸収して、楽しい大学生活を送ってほしいと思います」（太田さん）。

